

氏名(本籍)	武田大輔(兵庫県)
学位の種類	博士(体育科学)
学位記番号	博乙第2181号
学位授与年月日	平成18年2月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	子どものスポーツ活動に対する親の関わりに内包されるメッセージ —エリートジュニアサッカー選手を対象として—
主査	筑波大学教授 博士(体育科学) 中込四郎
副査	筑波大学助教授 岡出美則
副査	筑波大学助教授 博士(心理学) 坂入洋右
副査	筑波大学教授 教育学博士 新井邦二郎

論文の内容の要旨

1. 論文の目的

本論文の目的は、子どものスポーツ活動における親の関わりを、「親から子どもへ送られるメッセージ」という視点から捉え、子どもが捉えている親の関わりが彼らのスポーツ活動にどのような影響を及ぼしているのかを検討し、そして子どものスポーツ現場に有益な示唆を提供することである。この目的を達成するために5つの検討課題を設定し、実証的検討がなされている。

2. 論文の概要

各検討課題にそって本論文の概要を述べる。

(1) 親から子どもへ語られる言葉のメッセージ性の違い(検討課題1)

日常、頻繁に親から子どもに語りかけられている「がんばれ」という言葉が、受け手である子どもの目標志向性の違いによりどのような思いを喚起するのか、その差異について検討した。小学校6年のサッカー選手173名を対象に行った分析から、親からの熟達的な内容の言葉に対しては、子どもの認知の程度に違いはないが、成績や結果を重視した言葉に対しては、パフォーマンス志向の子どもの方が認知の程度の高いことを認めた。また、「がんばれ」という言葉に対して、パフォーマンス志向や両志向の子どもは成績や結果を重視した内容として、マスター志向の子どもは努力することやその過程を重視した内容として、高く認知していることを明らかにした。このようなことから、親からの言葉かけに対して、子どもの特性により、受け止められる言葉の意味内容の異なることが確認された。

(2) 親の関わりの構造(検討課題2)

子どものスポーツにおける親の関わりをより具体的に捉え、その構造について検討した。Jリーグ下部組織のジュニア及びジュニアユースに所属する選手の両親958名(父親469名、母親489名)そして選手(子どもたち:11歳~14歳、小学校5年生~中学2年生)460名を対象に、先に行われた予備調査に基づき用意された「親の関わり尺度」への回答を求め、得られた資料に因子分析が施され、マレーの要求理論を拠り所として解釈がなされた。その結果、親の関わりは、自信強化、間接承認、援助、統制、価値、結果指向、

情動評価の7つの要因（メッセージ内容）から構成されることを明らかにした。さらに、親の自己報告と子どもの認知の両資料を用いて、学年差や父母性差等について検討した。その結果、親の関わりにおける発達的变化は、概ね子どもの発達と呼応しており、またメッセージを受けとめる側である子どもには、概ねサポートタイプであるが、指示的な働きかけをする父親そして結果に対する関心の強い母親像を抱いているなどの特徴が認められた。

(3) 子どもが認知するメッセージの規定要因（検討課題3・4）

スポーツ活動での親の関わりに対する子どもの認知を規定する要因として、日常の親の養育スタイル（環境要因）ならびに目標志向性（個人要因）を取り上げ、両要因と認知されるメッセージとの関係を検討した。ここではJリーグ下部組織のジュニア及びジュニアユースに所属する選手485名を対象に、「親の関わり尺度」「養育態度尺度」「目標志向性尺度」を施行した。その結果、スポーツに対する親の関わりの子どもの認知に親の養育スタイルが影響を与え、そして目標志向性を高く有する子どもの方が、親からのメッセージを多く受け取っていることを確認した。

(4) 親の関わりと子どもの認知・情動的態度の関係（検討課題5）

子どもが認知する親の関わりが、子どものスポーツ活動に対する認知・情動的態度（内発的動機づけ、有能感、父母及びコーチに対する懸念）へ及ぼす影響について検討した。調査対象は、Jリーグ下部組織のジュニア及びジュニアユースに所属する選手そして彼らの両親の460家族であった。その結果、自信強化、間接承認、援助、価値は、子どものポジティブな態度（動機づけ・有能感）を育む親の関わりとなり、一方、母親からの情動評価は、子どものネガティブな態度（父母及びコーチに対する懸念）をもたらす関わりとなる。また、統制及び父親からの情動評価の2つのメッセージにおいて、子どもの態度にポジティブにもネガティブにも影響を与える可能性（二重メッセージとしての機能）が示唆された。

3. 結 論

以上の検討を踏まえ、本論文では次のような結論に至っている。

子どもへの親の関わりを「親から子どもへ伝えられるメッセージ」として捉えると、そのメッセージは自信強化、間接承認、援助、統制、価値、結果指向、情動評価から構成されている。そしてこれらのメッセージの受け手である子どもへの伝わり方には、彼らの認知している養育態度や彼ら自身の有する目標志向性に関係している。さらに、子どものスポーツ活動における動機づけ、有能感及び重要な他者に対する懸念といった彼らの認知・情動的態度に影響している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

親の関わりを「メッセージ」として捉える本研究者の立場は、独創的であると考えられる。そしてその内容あるいは構造を同定し、子どもの認知・情動的態度との関連を明らかにしたことは、子どものスポーツにおける親子関係に関するこれまでの研究を大きく飛躍させており高く評価できる。また、本論文の中では明確に実証するまでには至らなかったが、親による同一の関わりが2つの意味を同時に受け手に送る「二重メッセージ」としての機能の可能性を示唆しており、それは親子関係を立体的に捉える今後の研究への足がかりとなるものである。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。